

(最終講義)

## 私の仏教学研究と反省点

並川 孝儀

ご紹介いただきました並川です。よろしく願います。最終講義に当たりまして、三十六年間に何回ぐらい教室に足を運んだのかと思って電卓を叩いたら、ほぼ六〇〇〇回あまりであったことがわかりました。よく講義したなあと実感した一方で、どれだけ満足できる講義が本当にできたのかなあと不安でもあります。今日は最終講義ですから、講義らしい話をする予定だったのですけれども、今研究している内容は、本日とても発表できそうもないので、研究の思い出話ということでお許し願いたいと思います。

私の研究の第一歩は、卒業論文ですが、それは『阿毘曇五法行経』の研究』というものでした。『阿毘曇五法行経』は説一切有部という部派が五位七十五法、つまり様々な事物のあり方を大きく五つに分け、細かくは七十五に分けた、法体系を説いた經典であります。この經典は、それまでアビダルマ仏教の漢訳文献が七世紀の玄奘訳に依っていた中で、二世紀の安世高の訳であるということから、五位七十五法の成立において非常に貴重な意味を持つ文献ではないかということに着目しました。それが本当に安世高の訳であるかどうかを検証するために、『安

般守意経』など、確実に安世高の訳と言われている經典と、訳語等を比較した上で、私なりに『阿毘曇五法行経』も安世高の訳ではないかということを出定し、二世紀以前の五位七十五法の内容がそこに反映されているんじゃないかということを出定したのが卒業論文でした。今から思いますと、拙い研究ではありましたが、それなりにちゃんとはしていたかなあと思つています。これが私の研究の第一歩で、アビダルマ仏教の研究であるということになります。

そして、その五位七十五法の、五法の中の「心」と「心の作用」である「心」と「心所法」にテーマを絞りました。主に古訳、旧訳、新訳の漢訳の諸文献を用いながら研究をしたのが修士論文でした。

博士課程に入りますと、サンスクリット語力をもっとつけなければならぬという意識が強くなったものです。指導教授の春日井真也先生にそれにふさわしい文献を聞いたところ、「面白い文献がある。それはいまだどういふ文献かわかっていないし、研究するにはちよūdい。アビダルマ論書の要素もあるし、注釈文献もあるの」で、一通りのサンスクリット原典を学ぶにはいいんじゃないか」と言っていたのが、『Mahākarmavibhanga et Karmavibhaṅgopadesā』(以下、『マハーカルマヴィバング』)という文献であります。これから研究を続けるには基礎的な力を養う時期だというふうに出定していたものですから、博士課程の間はその文献をじっくり読んだという記憶があります。

その他には、説一切有部を始めとして様々な部派の文献に引用されている資料を、断片的ではありますが、カード化するという作業を行いました。そうすることによって数多くの文献が読めるので、資料をカード化するという作業に専念しました。ありがたいことに、我々の時代の博士課程というのは、今とは違ひまして、研究のノルマもなくゆつくりと何でも自由自在に出定できる時代でした。ですから、サンスクリットを読むこと、それから資料を精査

すること、三年間明け暮れたと言ってもよく、大変恵まれた時代だったと思います。

そのようにやっていく中でも注意していたことがありました。それは何かというと、仏教学をやるにしても文献学が中心になり、それだけに時間を費やして、教養的な知識、能力というものがなかなか養えない。例えば哲学であるとか、文学であるとか、そういった素養がどうしても疎かになる。仏教学というのは、どういう分野を研究しようとも、哲学的思考とか文学的素養とか、そういう能力がないと総合的な研究というのができないと言ってしまうと思います。そういう意味で博士課程は恵まれていて十分に時間があつたものですから、様々な本を読むことが出来た時代で、こうしたことも私の博士課程の時代であつたと覚えていきます。

博士課程の単位を修得し満期退学した後、しばらくしてからありがたいことにインドに行く機会をいただきました。それで、先ほどご紹介にありましたようにジャワハルラル・ネルー大学に留学することになりました。そこは、当時のインディラ・ガンディー首相のお父さんを記念して創立された国立大学で、大変素晴らしい先生方が所属されていて、デリーの郊外に立つ立派な大学でした。そこに行った当時、仏教学者はおられなかったので、そこで指導を受けた先生はロミラ・タッパルという著名なインド史の専門家でした。先生と最初にお会いした時に、先生からいろいろとお話し頂きましたが、「私は仏教も碑文も研究しているけれども仏教の専門家ではない」ということで、仏教に関する情報ついて頂いたのが、当時出版されたばかりのN・S・シユクラが校訂した“The Buddhist Hybrid Sanskrit Dharmapada”（以下、『ダルマパダ』）というテキストでした。私はすぐに、ニューデリーのインド学専門の大きな書店に飛び込んで三冊買いました。三冊買うのは、インドのペーパーバックというのは一ヶ月も使うとぼろぼろになりますので、三冊は買っておかないとということ、買ったのを覚えています。この書店は大変いいところでした、いつも昼には定食を出してくれます。そして、一日中書物の倉庫の中にも何も文句を

言われない。ということ、蒸し風呂になる夏以外の暇な時は、ここに行つて片っ端からインド学関係の本を見ていました。こうしたことが、私にこの『ダルマパダ』の研究の方向性を結果的には決めてくれたように思うわけです。この『ダルマパダ』をインドにいる間、このテキストを読むことに日々明け暮れました。チベットのゴルというところで発掘された写本に基づいたテキストの『ダルマパダ』というのは、「法句経」類の一つではあるんですけど、この文献をどう位置づければよいのかよくわからないのです。そこで私が気づいたのは、この文献がサンクリット語とも言えないし、パーリ語とも言えない非常に特異な文体をもった言語で書かれていることでした。ありがたいことに、書店で暇に任せて本を見ていた時に滅多に仏教と関わらない後代のセーナ王朝やパーラー王朝期の何かの碑文によく似た語形があつたのを思い出しました。そこで、ニューデリーの国立博物館、国立考古局で再度調べ直して、それが『ダルマパダ』の語形と非常に類似しているということを確認することができました。これは、本を自由に片っ端から読んだ一つの成果であつたと今でも喜んでいます。それ以後、世界で最初の研究と思つて必死になつて研究を続けました。

その後、帰国しますと、ドイツのG・ロートが同じ写本からテキストを新たに出していたんです。それを入手して、両テキストを比較しながら研究を進めることになりました。そうこうしている時に、法句経（ダンマパダ）の第一人者で、世界的な仏教学者である水野弘元先生もこの研究を始められました。私とは比較にも及ばない水野先生が研究に入られたら、もう後塵を拝するほかないなと思つたりもしました。けれども、水野先生はやはり立派な先生で、少しでも早く研究していた私に多少はリスペクトして頂いたんでしょうか、手紙で「君はこれに関してどう思うかね」と尋ねて頂いたり、励まされもしました。こういうこともあって、私としては負けじと頑張らなければならぬという思いが起こり、帰国以後も一生懸命この研究に没頭出来たということは確かであります。少し余

談になります。その時に私は水野先生の姿勢というものに感銘を受けました。水野先生のお生まれは一九〇一年だったでしょうから、私よりも四六歳上です。ですから、私がこれを研究していた当時、水野先生は八三〜八五歳ぐらいだったでしょう。ところが驚くぐらいエネルギーに研究をされていて、分らないところは分らないと言つて手紙を書いてこられる。その姿勢を今更ながら、感嘆するといえますか、やはり偉大な先生というのは、そういう先生なんだということを今話をしながら改めて思い出します。そういう先生に、そういう時に出会えたということも私にとって大きな思い出であります。

インドで碑文等を学んだお陰で研究を進めた結果、この『ダルマパダ』という資料は正量部という部派が所伝していたものではないかという学説を発表することができました。その説を支持していただくようにもなり、ホッとしました。すけれども、インドでの書物に向かった多くの時間が無駄ではなかったと改めて実感しております。

三〇代の半ばに入りますと、ありがたいことに専任講師として採用されました。ところが、専任となりますと研究と教育以外にも多くの仕事をしなければなりません。私の場合は六、七年間という間が特に雑多な仕事が多く大変でした。先日、研究室の後片づけをしていたら、その間の古いフロッピーがたくさん出てきましたが、全部事務に関するものばかりで、自分の研究用のフロッピーがなく非常に悲しく感じました。大学の様々な仕事に時間を取られるというのは、本学だけではなく、私立大学に共通する問題なのかもしれません。しかし、大学の教員というのは研究があつての教員ですから、研究をしっかりとっておかなければいけません。限られた時間の中で研究をするにはどうしたらいいだろうかと考えた時に、博士課程の時に読んでいた『マハーカルマヴィバング』の成果をまとめれば、比較的短時間でもまとめることが出来るんじゃないかと思ひ、それまでやった研究をまとめるようにしたわけです。忙しい時はそれなりに考え、今までやった研究を公にしていくという工夫をしていたということと思

い出します。

この『マハーカルマヴィバング』も、研究を続けているうちに、正量部の所伝の文献ではないかと考えるようになりしました。六道輪廻説が説かれたり、私が博士課程の頃に、正量部と犢子部の断片的な資料をカード化していた資料と照らし合わせると、この『マハーカルマヴィバング』の内容と合致するところが幾つもあることから、これも正量部の所伝ではないかという一つの仮説を立てました。

また、そうした忙しい時間の中で、原始仏教の主要な經典の一つである『ダルマパダ』の研究が契機になったんでしょうか、原始仏教の方に目が向いてきました。部派仏教の論書というのは体系化されたものですから、部分的に読んだら分かるというものではなくて、一定の体系を読みきららないとなかなか理解ができないわけです。そのためには継続した研究時間というのが求められるわけです。ですから、私はその忙しい時に論書の研究をするということは困難だと考えました。そこで、初期經典というのはまだ原初的な形態で、まだ体系化されていないものから、少しの時間でもあったらパーリ語のテキストを読みながら研究を進められるのではないかと私なりに考えていたのだと思います。それで、原始仏教を本格的に研究しようということとで初期經典を読み始めました。その中でも、とりわけ原始仏教に興味をもたせてくれた契機となったのは、古層の初期經典に世尊（ゴータマ・ブツダ）を「ブツダたちの中でもっともすぐれた」という用語で形容されている文章に出くわした時でした。中村元先生の訳によりますと、それを「最高の〈目ざめた方〉（ブツダ）」と、ブツダが「最高」と形容されて訳されています。ところが、私は最上級の前の名詞は複数形の属格か於格であるということから、「ブツダたちの中でもっともすぐれた人」と訳さなければならぬと考えたのです。「ブツダたちの中でもっともすぐれた人」ということは、ゴータマ・ブツダの他にブツダがいて、その中でゴータマが一番すぐれているということから、ゴータマ・ブツダ以外に

もブツダと呼称された仏教修行者たちが存在していたことを示唆した表現であるとわかったのです。そうならば、これは従来までの理解とはまったく違うことになります。その資料との出会いは、今でも感激したことを鮮明に覚えていています。恐らく、この語句との出会いが今日に至るまで原始仏教の一つのテーマであるゴータマ・ブツダ論を研究するきっかけになったと思っています。研究というのは、やはり感動に基づいているものではないでしょうか。それ以後、私は複数形などの用法にも注意を払い、改めてブツダに関係する用語を洗い直しました。すると、興味深い表現がいっぱい出てきました。例えば「ブツダに従って悟ったコンダンニャ長老は」というように、ゴータマ・ブツダの直弟子にブツダという表現がされているような用例などがそうです。その他、今までそれほど学界で注意されなかったようなものも、こういう読み方をしたら面白いんじゃないかというようなものも出てきて、原始仏教に多くの時間を割くようになってきたわけです。そういうことで、今日でも原始仏教を研究していますし、これからも原始仏教の研究を続けて行きたいと思っています。

そういう経緯で、忙しい時期には忙しくても出来る研究を自分なりに工夫していたんだと、後付けになるかもしれませんが、そう思っています。

しかし、私は『マハーカルマヴィバンガ』も『ダルマパダ』も正量部の所伝だという仮説を立てた関係もあり、やはり正量部に関する部派仏教の研究をしたいと思いました。ちょうど四一歳か四二歳ぐらいだったと思います。部派仏教研究をするということになると、それに没頭するような時間というものがなければ、本格的に出来ないというところで、大学のさまざまな仕事に関して申し訳ないとは思いつつも距離を置き、研究の時間を意識的につくりました。それは六、七年間ほど続きましたでしょうか。それで、正量部の研究を続けるのが可能となりました。その時の私の生活というのは、授業が終わったら自分の研究だけするということではほぼ毎日明け暮れておりました。

ですから、四〇歳を過ぎて初めて研究者として研究に専念する体制を整えられたんではないかと思えます。

その主たる研究対象は、それまであまり学んでこなかったチベット語の文献でした。サンスクリット語、パーリ語というのは読んできたわけですからそれなりに読めたんですけれども、その正量部の文献がチベット語であったものですから、その解説は本当に難行苦行でした。そしてまた、正量部というのはほとんど解明されていない未知の部派で、僅かにプトガラ論を主張した部派である以外はほとんど分からない状況でした。もし正量部の文献が他にあつたら、それを参考にしてある程度読んでいけるのですが、参考にする文献がありません。その中の悪戦苦闘の年月は、本当に私の身体と精神に相当ダメージを与えました。ただ、私の友人でチベット学が専門の先生に読みづらいところを聞きながら進められたのはありがたかったです。この正量部のチベット語訳『有為無為決択』という文献はダシャバラシュリーミトラによって紹介されたテキストで、『俱舍論』でいえば第三章、四章、五章、六章、つまり「世間品」、「業品」、「随眠品」、「賢聖品」といわれる、いわゆる中核の思想に該当したものです。したがって、この文献をしつかりと読み込めば、ある程度正量部の思想の中核が理解できるということ、懸命に翻訳に当たりました。とはいっても、不十分で満足できないところは今も残っています。そういう意味で、もっと長く研究を続けるべきであつたと少し後悔するところではあります。

この正量部の研究は、どういうところに意義があつたかといいますと、今までの部派仏教がインドの説一切有部とスリランカの南方上座部を中心とした研究であり、またインドの諸部派の中で説一切有部と異なつた部派がどういった思想をもっていたのかということもほとんど研究はされてこなかった状況にあつて、この正量部の中核思想がある程度分かつたことによつて、説一切有部と同じ上座部系の部派とがどの程度類似性があり、どの程度の差異があるのかということも比較できるようになつたことは、部派仏教研究の一つの大きな成果であつたと自負してい



いのではないかと思つています。特に一つ付け足しておきたいことは、正量部は、七世紀の玄奘三蔵による『大唐西域記』の報告によれば、説一切有部とほぼ同様の大ききをもつ部派として紹介されています。正量部は未知の部派であります、それは小さい部派であるからという意味ではなくて、ただ現在に資料が残っていない理由によるものです。特に、説一切有部は東トルキスタンと中央アジアに大きな勢力をもっていましたから、中国で翻訳する人々がその地域から中国へ諸文献を持ち帰るのは、至極当然のことです。それに対して、正量部のようにガンス河中流域から西インド地域に勢力をもった部派の諸文献を中国に持ち帰る可能性は低く、そういう意味で漢訳文献に残らなかったものであつて、現存文献が少ないから小規模な部派であつたとの考えは、必ずしも歴史的事実を反映したものではなかつたと思ひます。こういう話をすれば切りないので、ここで終えておきます。

四〇歳代の最後の歳に、「正量部の研究」で博士論文を提出しました。先ほども少し述べましたように、少しまだ分からないところ、また説一切有部の論書を読み込みたいという箇所もいくつかありましたので、私はこの年に提出するつもりはなかつたのです。しかし、何人かの先生から、パーフェクトなんてないんだから、もう出しなさいとか、五〇歳代に入ったら出来なくなるから、四〇代の体力のある時に出された方がいいですよというお言葉を頂いたわけです。こうした勧めもあつて、四九歳の時に提出しました。不十分なところを残したという自覚があつたためだと思ひますが、口頭試問の時に名古屋大学の加藤純章先生が持つてこられた私の論文が一層厚く思えるほどに付箋が付いていたのを見て、極度に緊張したのをよく覚えています。しかし、それほど読んで頂いたと大変感謝しております。

そういうようなことで何とか学位論文を授与され、すぐそれを出版すべきだとお勧めいただいたんですけども、本にしたのは二〇一一年ですから、一〇年以上も経つてから出しているんです。学位を出したちようどその後

ローマ大学のG・ツッチ先生が、ローマから出てる雑誌に正量部所伝の『アビダルマ・サムツチャヤ・カーリカー』という、サンガトラータが書いた写本があり、これをA・ガルガノという人物と一緒に出版するという予告が出ていました。ツッチ先生が日本に来られた時、その文献の内容まで紹介され、梵文の『俱舍論』と七割程度一致しており、ヴァイクシュキーという特殊な文字で書かれた写本だということまで大谷大学での講演でされているんです。それを見た時にもう間近に出版されると期待をもちました。というのも、『有為無為決択』にはサンスクリット文献からの引用文が多数ありましたので、できればそれを見てからチベット語訳の『有為無為決択』と比較して検討できるところがあったら、早くサンスクリット語に読み換えてもう一度しっかりと読み直したいと思ったからです。このテキストの出版を待っていたことが学位の出版が遅れた主な理由でした。それから、ローマ大学のS・ヴィータ先生に連絡を取ってもらったのですが、A・ガルガノさんからは、ツッチ先生はそう書いておられるけれども私は写本を見たこともない、といった訳の分からない返事が届いたんです。結局、つい数年前になってツッチ先生のご自宅からその写本が出てきたそうです。もう少しこの写本が早く世に出ておれば、私の本ももう少し充実したものになっていたかもしれない。興味のある若い先生方がおられれば、この写本を参考にして一層正量部の研究を進めていただいたらありがたいと思っています。

五〇歳代に入りますと、また大学で役職につき、病気で倒れるまで六年間、正直にいつて多忙を極めました。したがって、その間に研究できたことというのは、まさにそれまで四〇歳代でやってきたこと、それをまとめるという作業しかできず、新たな研究というようなことは残念ながらできませんでした。

病気に倒れて、それから皆さんに身体を気遣っていただいたお陰で、五八歳から再び研究に没頭する時間を頂戴することができました。友人の勧めもあって、それまでの研究をまとめ、初めて原始仏教の研究成果を『ゴータ

マ・ブツダ考』(大蔵出版、二〇〇五年)として上梓しました。これは、ゴータマ・ブツダに関して創作された伝承と歴史的事実という二つの側面を意識しながら論じた、ある意味、刺激的ともいえるゴータマ・ブツダ論です。これは評価が両極端に分かれ、さまざまな意見を頂きましたが、それだけ注目していただいたものと喜んでおります。要するに、歴史的存在者としてゴータマ・ブツダを捉えようとした研究です。

『スッタニパータ ―仏教最古の世界―』(岩波書店、二〇〇八年)は、『スッタニパータ』の第四章「アッタカヴァツガ」と、第五章「パーラーヤナヴァツガ」という最古層とそれ以外の古層を比較しながら仏教の原初的な形態を文献と思想の両面からまとめた本です。

『ゴータマ・ブツダ 縁起という「苦の生滅のシステム」の源泉』(佼成出版社、二〇一〇年)というのは、仏教の根本思想と言われる縁起説の成立と思想について分かりやすく、一般向けに書いた本です。

『インド仏教教団 正量部の研究』(大蔵出版、二〇一一年)は、先ほど述べましたように私の学位論文を基にして書き上げた本です。

そして『ブツダたちの仏教』(筑摩書房、二〇一七年)というのはつい最近出した本ですが、これは以前から考えていた私の仏教観をまとめた本です。仏教の教えというのは、ある時代と地域に生きる人々にふさわしい教えが歴史を通して連続して説き明かされてきたというのが私の考え方です。したがって、ゴータマ・ブツダの教えでも当時のインドの人々にとってふさわしい教えであり救いであって、今もそのままその教えが日本で通じるかという点、世界観も人生観も違うし社会状況も違いますから、すべてが通じるわけではないのです。今は今の仏教でなければならぬというのが仏教という宗教の特質であるということ、仏教の歴史を通してさまざまな視点より論じた本であります。

今までこのようなことを研究してきたわけですが、現在は仏教という宗教が起こった時の根本的立場は一体何であったのだろうかということテーマに研究しています。例えば、仏教は無我説を提唱したことによって仏教が成立したという考え方が定着しているようですが、私はそうとは考えていません。もっと異なった根本的な立場というのがあったのではないかと考えています。その根本的立場は何なのかということでは具体的には申し上げませんが、数年先には何らかの形でまとめられればと願っております。老後の楽しみとして研究できればというように今考えているところであります。

ここから少し、私の拙い研究生生活の中で、留意してきた点、また反省した点などについて述べておきたいと思えます。たくさんあるのですが、挙げたらき切りがありませんので三点に絞ってお話しておきます。

まずは「原典を精読すること」ということについて述べてみます。私たちが研究している仏教学というのは人文科学ですが、その研究対象は、主として文献であろうかと思えます。その文献をいい加減に読むということは、その研究が成立していないことを意味します。ですから、文献をどれだけ正確に読むかが研究の第一歩であり、最終点でもあるということを常に留意しておりました。私は十分にできているとは思いませんが、原典を精読するということは絶対必要な姿勢であります。精読するというのは、ただ語学力だけでもなく、ただ文法通りに読むというだけでもなく、その原典の時代背景、思想や文化というものも、正しく理解していることであろうかと思えます。ある先生が仰ったのを今でも本当に鮮明に覚えています。翻訳を軽んじる研究者がいるけれども、翻訳は総合的な研究成果であり、すばらしい論文でもあると。ですから、この原典解読にはしっかりと研究する姿勢とこれに多くの時間をかけるということが必要であると思います。それともう一つは、文献を拾い読みするのではなく、最初から最後まで直接関係しない部分があっても読み切るということが正しい読み方ということです。文脈も分からずに

一部分だけ読むということは、実は読んでいないのかもしれないかもしれません。これは反省を込めて強く自覚している点であります。今は検索すれば、資料は簡単に見つけられます。多くの方がそれで検索するわけですから、似たり寄ったりの論文になるのでしょう。やはり独創的な研究をするということは、最初から最後まで読んで自分だけの読みができた時に、その解釈に独創性が生まれてきます。ここに研究者の方が多数おられますけれど、要領で読むのではなくって、じっくりと時間をかけて読むという姿勢を是非とも保っていたいただきたいし、時間がかかっても、それが結果的に独創的な成果へと繋がっていくのであると理解していただければ嬉しく思います。

それから二つ目が「特定の知識に満足しないこと」ということです。「私はこの分野が専門です」と言って、その分野だけしか研究しない人がいます。例えば、法然上人の研究をする場合、法然上人だけを研究しても、法然上人は分かりません。その前時代の流れを読み解き、同時代の宗教者を知り、宗教観を比較したりして初めてそこで法然上人という特色が見えてくるわけです。つまり、幅広い知識というのが必要なのです。先ほども言ったように、最近の博士課程の研究者は、様々に制約されて、なかなか自由な研究ができないために、色んな教養を身につけるといふことはできないと思うんですけど、やはり可能な限り幅広く仏教を学ぶのがよいでしょう。ある先生がこう仰ったのです。「最近の若い研究者は葉っぱの葉脈ばかりを研究して、その葉っぱがどういう植物で、どういう木で、どういう森に植わっていて、どういう山にその森があるかということは何も知らずとしない。そんな研究はよくない」と。それは恐らく私への指導だったと思います。それはご指摘の通りで、その全体が見えないのに個が見えるわけがありません。専門ではなくても、ものの考え方とか、見方とか、捉え方などを身につけるために、特定の知識に満足しないで、幅広く学ぶ姿勢が肝要でしょう。そのことによって逆に個別的で特殊な自分の研究がはつきりと見えてくるということを、留意しなければなりません。

それから最後になりましたが、「業績主義に陥らないこと」を話しておきたいと思います。これは個人の責任ではないんですけれども、最近はずより量が重視される評価にシフトしているように思われます。大学でも評価はほとんど点数主義で、ポイント化するわけです。ですから、要領よく形式さえ守ればよいという風潮が生まれてくるのです。人文科学に関していえば、社会的評価を得るために研究しようとして、自分が読みたい文献を時間をかけてじっくりと研究するという姿勢を失ったら、この学問は成立しなくなります。こういう点もしっかり自覚しておかなければならないと思います。

ここでは三点を述べましたが、こうしたことを反省しながら研究してきたわけですけど、果たしてその通りに行けたかどうかは疑わしく、反省しきりであります。また、四〇年以上も仏教学に関わってきたにもかかわらず、自分の研究が仏教のごく一部に過ぎないということも知ることになりました。私は履歷書に自分の専門分野を原始仏教・部派仏教と書きます。それでもおこがましいとは思いますが、それぐらいは許してもらえるかなとも思っております。本日、最終講義をさせていただいたことで、改めてこうしたことが実感でき、私自身にとってもよかったですと喜んでおります。

こういう機会を頂いたことに感謝しつつ、以上をもって最終講義を終わらせていただきます。ご静聴どうもありがとうございました。